

相談したくてもしない援助要請者に着目した援助要請の傾向を測定する 尺度の作成

Development of a scale to measure of help-seeking tendency focusing on people
who want to help-seeking but cannot

大篠 明莉

大妻女子大学大学院人間文化研究科

Akari Oshino

Graduate School of Studies in Human Culture, Otsuma Women's University

2-7-1 Karakida, Tama-shi, Tokyo, 206-8540 Japan

キーワード：援助要請，尺度作成，大学生

Key words : Help-seeking, Development of a scale, University students

抄録

他者を頼ったり助けを求めたりすることは援助要請という概念で説明されるが、特に臨床心理学領域において援助要請が注目される背景には、一人で対応しきれないような困難を抱えても誰にも相談しない現象が一般的に見られることが挙げられる。困難を抱えても誰にも相談しない者の存在は先行研究からも明らかであるが、これまでの研究からは、悩みを相談しない者の中には「そもそも相談意図のない者」と「相談したくてもしない者」が存在することも指摘されてきた。

ところで、これまで個人の援助要請の傾向を測定する尺度として主に永井（2013）の援助要請スタイル尺度が用いられてきた。この尺度では、個人の援助要請は「援助要請自立型」、「援助要請過剰型」、「援助要請回避型」の3つに分類され、困難を抱えても誰にも相談しない者は援助要請回避型に該当すると考えられるが、その中には「そもそも相談意図のない者」と「相談したくてもしない者」が混在していると推測される。しかし、茨木ほか（2014）は「相談したくてもできない」場合と「必要がなく相談しない」場合を区別した上で、より積極的な介入が必要と思われる「相談したくてもできない」場合の適切な支援について明らかにする必要があると述べていることから、両者を援助要請回避型として一括りにすることは望ましくないと考えられる。

そこで本研究では、「そもそも相談意図のない者」と「相談したくてもしない者」の区別された援助要請の傾向を測定する尺度を作成することを目的として、大学生を対象に、尺度項目を選定するためのアンケート調査（研究1）と、作成した尺度の信頼性と妥当性を検討するための質問紙調査（研究2）を実施した。その結果、大学生の援助要請の傾向は、援助要請逡巡型（相談したくてもしない者）、援助要請無用型（そもそも相談意図のない者）、援助要請過剰型、援助要請自立型の4つに分類され、また、援助要請逡巡型は、相談行動のコストを懸念しやすい傾向を有していることが示唆された。これらの結果から、相談したくてもしない者の援助要請行動を喚起する上では、秘密が守られながら援助要請が行える場を整えることや、そういった場の存在を周知することが有用な支援であると考えられた。

永井智. 教育心理学研究. 2013, 61(1), p.44-55.

茨木詩織ほか. 筑波大学心理学研究. 2014, 48, p.19-28.

1. 問題と目的

日常生活の中で悩みや不安を抱えることは、多くの人が経験したことがあるのではないだろうか。

私立大学学生生活白書 2022^[1]によると、特に悩みや不安はないと回答した大学生は 11.0%となっていることから、残り 89.0%の大学生は何らかの悩

みや不安を抱えている状況にあることが窺われる。西山ほか^[2]は、今日の社会、家庭や学校などの諸状況の変化や有り様は、感受性も強く多感な青年期後期の真ただ中を生きる大学生に多大な影響をもたらすと考えられること、また、この時期は精神疾患が好発しやすい時期であるということなどから、現代の大学生は傍目で見ると以上に精神的に困難感を抱えているのではないかと推察している。

悩みや不安を抱え、それが自分一人では解決できないような問題であると思われるとき、我々は他者を頼ったり相談することによって解決をを図ろうとする。このように他者を頼ったり助けを求めたりすることは援助要請という概念で説明することができ、永井^[3]は援助要請について「個人が問題を抱え、それを自身の力では解決できない場合に、必要に応じて他者を頼ることは重要な対処方略の一つである」と述べている。

援助要請に関する研究の中でも、特に臨床心理学分野での援助要請研究においては、主に悩みや精神的な問題を抱えた際に身近な他者や専門家へ相談する行動などが扱われている^[4]。例えば、永井^[5]は、中学生を対象として抑うつと援助要請意図との関連について研究を行っており、本田^[6]は、援助要請への介入に向けた基礎的研究として、援助要請の認知行動的特徴や自尊感情と精神的健康との関連についての調査を行っている。このように臨床心理学領域においても、様々な視点から援助要請にまつわる研究が行われているが、臨床心理学領域において援助要請が注目される理由として永井^[4]は、一人では対応しきれないような困難を抱えても、誰にも相談しない現象が一般的に見られるという点を挙げている。先述したように、私立大学学生生活白書 2022^[7]によれば、89.0%の大学生が何らかの悩みや不安を抱えているという状況にあり、その中でも、悩みや不安を「誰とも相談しない」と回答した学生は18.5%存在している。また、永井ほか^[7]は、中学生が最も悩みを相談していたのは友達であった一方で、友達に相談したいと思っただけでなかったケースが男子で10.0%、女子で17.0%と一定数存在したこと、さらに悩みを相談しない者の中には「そもそも相談意図のない者」と「相談したくてもしない者」が存在することを明らかにしている。加えて、茨木ほか^[8]による調査からは、悩みを持って誰かに相談したくてもできなかった出来事を、質問紙に回答した者のうち48.4%

が経験していたこと、さらに女性(57.5%)の方が男性(32.9%)よりも経験率が高かったという結果が出ている。以上のことから、誰しものが悩みや不安を抱えたからと言って他者の助けを求めるわけではなく、相談しない者もいれば、相談したくてもできない葛藤を抱える者もいることが分かる。このように、援助要請にはいくつかのタイプが存在すると考えられるが、永井^[3]はそれを援助要請スタイルとして分類している。

永井^[3]は、援助要請の単純な量だけでなく、その質(どのような援助要請を行うのか)を考慮するという視点から、援助要請を3つのスタイルに分類し、それぞれのスタイルを測定するための尺度を作成している。援助要請スタイル尺度において個人の援助要請傾向は、①困難を抱えても自身での問題解決を試み、どうしても解決が困難な場合に援助要請を行う「援助要請自立型」、②困難を抱えた際に、十分な自助努力を行わずに安易に援助要請を行う「援助要請過剰型」、③困難な問題を抱えても、一貫して援助要請を回避する「援助要請回避型」の3つに分類される^[3]。

各援助要請スタイルの特徴について永井^[9]は、援助要請スタイル間の差異を明らかにするべく、援助要請研究における基本的変数を取り上げて検討を行っている。その結果、援助要請自立型は、悩みの肯定的側面も認知しつつある程度適切に距離を保つことができていることができており、対人関係においても「親和傾向」が高く「拒否不安」が低いなど、安定的な認知を持っていることが明らかとなった。また、他者の意見などに左右されすぎず自己決定的に行動し、自己の成長を志向することができると考えられ、必要に応じて援助要請はするが、自身で悩みに対処する資質も高いと考えられる。

援助要請過剰型については、一見サポート資源が多く良好な対人関係を築いているように見えるが「拒否不安」の高さなど、対人関係に不安を有している可能性や、悩みに対して適切な距離をとることができない可能性が示唆された。加えて、援助要請せずに自ら問題に向き合うことについて、十分な自信を有していない可能性が示されていた。

援助要請回避型については、相手からの拒絶への恐れなどはないものの、良好な関係を有しているわけではなく、概して他者との距離が疎遠である可能性が示唆された。また、1人で問題に取り組むことの有用性を認知している可能性も推察され

る結果となったが、適切に悩みに向き合いきれていないとは言い難く、抑うつ得点も自立型と比較して高かった。これらのことから、回避型は積極的・肯定的理由から援助要請を回避しているとは言いきれず、場合によっては何らかの支援が必要となる可能性が示されたと永井^[9]は述べている。

永井^[9]の援助要請スタイルに当てはめると、困難を抱えても誰にも相談しない者は援助要請回避型に該当すると考えられ、その中には「そもそも相談意図のない者」・「相談したくてもしない者」のどちらも含まれると推測される。援助要請回避型の中でも特に「相談したくてもしない者」について勝又ほか^[10]は、相談したいと思っながら相談できないということ自体が苦痛を生じさせる可能性があることから「そもそも相談意図のない者」よりも援助が必要であると指摘しており、この両者は区別される必要がある^[7]。また、茨木ほか^[8]も、「相談したくてもできない」場合と「必要がなく相談しない」場合を区別した上で、より積極的な介入が必要と考えられる「相談したくてもできない」場合の適切な支援について明らかにする必要があると述べている。以上より、「そもそも相談意図のない者」と「相談したくてもしない者」は、結果としては援助要請を行わないものの、両者の援助要請の傾向を援助要請回避型として一括りにすることは望ましくないと考えられ、両者の特徴を詳細に把握するためにはそれぞれを区別した上での検討が求められると言えるだろう。しかし、これまで「そもそも相談意図のない者」と「相談したくてもしない者」とを区別した検討はあまり行われていない^[8]。また、援助要請スタイル尺度^[3]によって分類された援助要請回避型の中にはこの両者が混在すると考えられるが、永井^[9]のように個人の援助要請の傾向を測定する尺度は少なく、「そもそも相談意図のない者」と「相談したくてもしない者」を区別している尺度も管見の限り見当たらない。

目的：これまで述べてきたことを踏まえ、本研究では、「そもそも相談意図のない者」と「相談したくてもしない者」の区別された援助要請傾向を測定する尺度を作成することを目的とする。「そもそも相談意図のない者」と「相談したくてもしない者」とが区別された尺度を作成することは、大学生の援助要請の傾向をより詳細に把握するうえで意味のあるものと考えられる。また、それぞれの援助

要請傾向が持つ特徴を把握することにより、特に「相談したくてもしない者」への支援を考える際の一助となることを見込んでいる。

研究方法：尺度作成を進めるにあたっては、まず、「そもそも相談意図のない者」と「相談したくてもしない者」とを区別して測定するための質問項目を考案し、その後、暫定的に作成した尺度の信頼性と妥当性を検証する必要があると考えられる。そのため、尺度作成の第一段階として、研究1では「そもそも相談意図のない者」と「相談したくてもしない者」とを分類するための質問項目を選定するため、大学生を対象としたアンケート調査を行うこととした。その後の研究2では、研究1で得られたデータや援助要請スタイル尺度^[3]をもとに作成した援助要請の傾向を測定する尺度の信頼性と妥当性を検証するため、大学生を対象とした質問紙調査を行うこととした。

2. 研究1（尺度の項目作成のための調査）

目的：研究1では、「そもそも相談意図のない者」と「相談したくてもしない者」とを分類するための質問項目を選定することを目的とした。項目の選定にあたっては、大学生を対象としてアンケート調査を行い、より大学生の現状に即した質問項目を考案できるよう試みた。

方法

調査対象者：調査対象者は、首都圏の女子大学に通う大学生102名であり、47名から回答を得た（回収率46.07%）。調査対象者の平均年齢は19.06歳（ $SD=1.36$ ）であった。

調査方法：本調査はGoogle Formを用いた自己記入式のWebアンケートで実施された。調査実施に際しては、調査を行った大学にて授業時間外に対象となる大学生を募り、研究概要を記した説明文書と、アンケートに回答するためのQRコードとURLが記載された用紙を配布し、協力を依頼した。調査実施期間は、2023年6月27日（火）から7月21日（金）であった。

結果：得られた回答をKJ法に準じた方法を用いて分析した結果、「そもそも相談意図のない者」は、「相談することで迷惑をかけたくないなどの気遣いが生じる」、「他者に頼らず解決しようとする」、「悩んでいることの内容を言いたくなかった」、「相談しなくても大丈夫だと感じた」などの特徴を有していると推察された。また、「相談したくても

もしない者」は、「悩みや不安を話せない」、「相談することにメリットがないと思っている」、「相談することで相手に迷惑をかけたくないなどの気遣いが生じる」などといった特徴を有していると推察された。これらの結果をもとに、「相談したくてもしない者」と「そもそも相談意図のない者」とを分類するための質問項目について検討し、最終的

に 14 の項目を考案し、永井^[3]の援助要請スタイル尺度の中で援助回避型を測定する 4 項目の代わりに組み入れた。したがって、永井^[3]による援助要請過剰型を測定する 4 項目、援助要請自立型を測定する 4 項目と合わせた計 22 項目の尺度を、暫定的な大学生の援助要請の傾向を測定する尺度とした (表 1)。

表 1 永井 (2013) の 8 項目と今回考案した 14 項目を合わせた尺度

1	よく考えれば大したことないと思えるようなものでも、わりと相談する
2	悩みを抱えたら、それがあまり深刻なものでもなくても、相談する
3	比較的ささいな悩みでも、相談する
4	困ったことがあったら、割とすぐに相談する
5	相談より先に自分で試行錯誤し、いきづまったら相談する
6	先に自分で、いろいろとやってみてから相談する
7	少しづらくても、自分で悩みに向き合い、それでも無理だったら相談する
8	悩みが自分一人の力ではどうしようもなかった時は、相談する
9	相談したいと思っても、相手に気を遣わせてしまうと思うため、相談しない
10	相談したいと思っても、自分の印象が悪くなると思うため、相談しない
11	相談したいと思っても、悩んでいることの内容を知られたくないので、相談しない
12	相談したいと思っても、なんと云えばよいか分からないため、相談しない
13	相談したいと思っても、相談することが恥ずかしいので、相談しない
14	相談したいと思っても、否定的な答えが返ってくると思うため、相談しない
15	相談したいと思っても、相談すると状況がさらに悪くなると思うため、相談しない
16	相談したいと思っても、理解してもらえないと思うため、相談しない
17	これまで、どんな悩みであっても自分一人で解決してきたため、相談しない
18	どんな悩みでも、自分一人で解決しなければと考えているため、相談しない
19	どんな悩みでも、悩んでいること自体を言いたくないため、相談しない
20	どんな悩みでも、自分の考えを重視するため、相談しない
21	どんな悩みでも、自分が悩んでいると知られたくないため、相談しない
22	どんな悩みでも、相談しても変わらないと思うため、相談しない

3. 研究 2 (尺度の信頼性・妥当性の検討)

目的: 研究 2 では、研究 1 で作成した尺度の信頼性と妥当性を検証することを目的として、大学生を対象とした質問紙調査を行った。構成概念妥当性を検討するにあたっては、SRS-18^[11]、相談行動の利益・コスト尺度改訂版^[12]、K6 日本語版^[13]を使用し、加えて、ここ 1 か月の援助要請の経験に関する質問 (悩みや不安を感じた経験の頻度、相談を行った頻度) についても尋ねた。

方法

調査対象者: 調査対象者は、首都圏にある 4 つの大学に通う大学生 212 名であり、131 名から回答

を得た (回収率 61.79%)。調査対象者の平均年齢は 19.48 歳 ($SD = 1.32$) であり、性別は、男性 70 名 (53.44%)、女性 59 名 (45.04%)、その他 2 名 (1.53%) であった。

調査方法: 本調査は Google Form を用いた質問紙調査で実施された。調査実施に際しては、調査を行った大学にて、授業時間外に対象となる大学生を募り、研究概要を記した説明文書と調査に回答するための QR コードと URL が記載された用紙を配布することで、協力を依頼した。調査実施期間は、2023 年 9 月 27 日 (水) から 12 月 25 日 (月) であった。

結果: 回答が得られた 131 名のうち、内容に不備のあった 16 名の回答を除いたものを分析に使用した。したがって、有効回答数は 115 であり、有効回答率は 87.79%であった。

研究 1 を元に作成した援助要請の傾向を測定する尺度の尺度構造を確認するため、全 22 項目につ

いて探索的に因子分析を行ったところ、固有値の変化は 7.442, 3.241, 1.941, 1.053…となり、4 因子構造が妥当であると解釈された。そこで、再度 4 因子を仮定して、因子分析(最尤法・プロマックス回転)を行った。最終的に得られた結果を表 2 に示す。

表 2 作成した援助要請の傾向を測定する尺度の因子分析結果(最尤法・プロマックス回転, N=115)

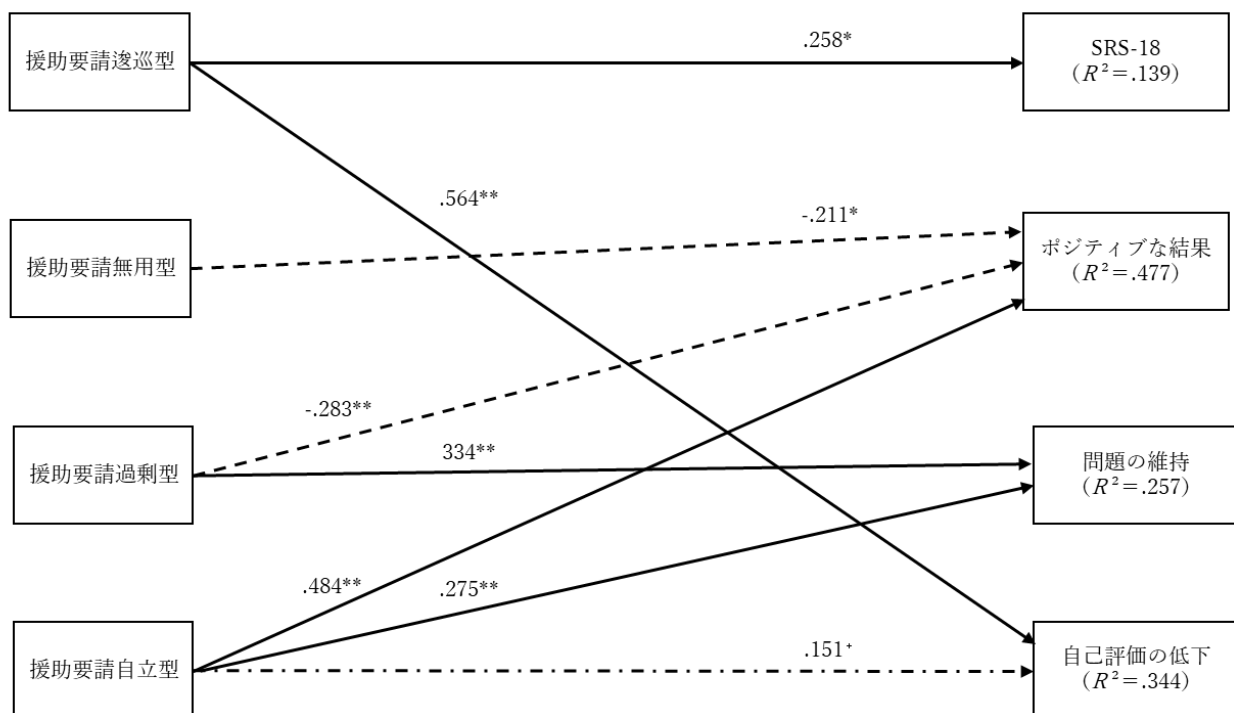
項目	項目内容	I	II	III	IV	
第 I 因子: 援助要請逡巡型 ($\alpha = .931$)						
	どんな悩みでも、悩んでいること自体を言いたくないため、相談しない	.919	-.128	-.082	-.028	
	相談したいと思っても、相談することが恥ずかしいので、相談しない	.904	.019	.063	-.118	
	相談したいと思っても、自分の印象が悪くなると思うため、相談しない	.863	-.102	.009	.008	
	どんな悩みでも、自分が悩んでいると知られたくないため、相談しない	.780	.060	-.102	.004	
	相談したいと思っても、否定的な答えが返ってくると思うため、相談しない	.727	.089	.202	-.125	
	相談したいと思っても、悩んでいることの内容を知られたくないので、相談しない	.678	.116	-.091	.158	
	相談したいと思っても、なんとと言えばよいか分からないため、相談しない	.647	.074	-.021	.052	
	これまで、どんな悩みであっても自分一人で解決してきたため、相談しない	.611	.145	-.055	-.060	
	相談したいと思っても、相談すると状況がさらに悪くなると思うため、相談しない	.578	-.087	-.009	.026	
	どんな悩みでも、自分の考えを重視するため、相談しない	.575	.152	.114	.047	
	相談したいと思っても、相手に気を遣わせてしまうと思うため、相談しない	.441	.237	-.177	.217	
第 II 因子: 援助要請無用型 ($\alpha = .878$)						
	どんな悩みでも、相談しても変わらないと思うため、相談しない	.069	.822	.084	-.057	
	どんな悩みでも、自分一人で解決しなければと考えているため、相談しない	.053	.769	-.104	.099	
	相談したいと思っても、理解してもらえないと思うため、相談しない	.242	.751	.071	-.084	
第 III 因子: 援助要請過剰型 ($\alpha = .907$)						
	よく考えれば大したことないと思えるようなものでも、わりと相談する	.098	.020	.881	-.030	
	比較的ささいな悩みでも、相談する	-.147	.134	.860	.024	
	悩みを抱えたら、それがあまり深刻なものでなくても、相談する	.136	-.101	.846	-.004	
	困ったことがあったら、割とすぐに相談する	-.106	.054	.835	.035	
第 IV 因子: 援助要請自立型 ($\alpha = .766$)						
	相談より先に自分で試行錯誤し、いきづまったら相談する	.155	-.204	-.140	.752	
	先に自分で、いろいろとやってみてから相談する	-.257	.276	-.156	.746	
	悩みが自分一人の力ではどうしようもなかった時は、相談する	-.003	.059	.306	.661	
	少しづらくても、自分で悩みに向き合い、それでも無理だったら相談する	.123	-.245	.343	.575	
		因子間相関	I	.586	-.389	.210
			II	-	-.546	.109
			III		-	.091

第Ⅰ因子は、“どんな悩みでも、悩んでいること自体言いたくないため、相談しない”や“相談したいと思っても、自分の印象が悪くなると思うため、相談しない”、“相談したいと思っても、なんと云えばよいか分からないため、相談しない”といった項目で負荷量が高く、「相談したい思いはあるが色々な障壁があるので相談しない」傾向を示していると解釈された。そのため、因子を構成する項目の内容から、「援助要請逡巡型」と命名した。第Ⅱ因子は、“どんな悩みでも、相談しても変わらないと思うため、相談しない”、“どんな悩みでも、自分一人で解決しなければと考えているため、相談しない”、“相談したいと思っても、理解してもらえないと思うため、相談しない”の3項目で構成されており、「援助要請を行うつもりがない」傾向を示していると解釈された。そのため、因子を構成する項目の内容から「援助要請無用型」と命名した。第Ⅲ因子は、因子を構成する4項目すべてが、永井³⁾の援助要請スタイル尺度において援助要請過剰型の因子を構成する項目と一致していたため、それに倣い「援助要請過剰型」と命名した。

第Ⅳ因子は、因子を構成する4項目すべてが、永井³⁾の援助要請スタイル尺度において援助要請自立型の因子を構成する項目と一致していたため、それに倣い「援助要請自立型」と命名した。

尺度の信頼性を示すクロンバックの α 係数は、第Ⅰ因子で $\alpha=.931$ 、第Ⅱ因子で $\alpha=.878$ 、第Ⅲ因子で $\alpha=.907$ 、第Ⅳ因子で $\alpha=.766$ となり、内的整合性はおおむね確認されたと考えられる。加えて、構成概念妥当性を検討するため、作成した尺度と、その他に回答を求めた尺度との間で相関分析を行った結果、おおむね妥当性を有していると解釈された。

次に、上記4つの援助要請の傾向が、心理的ストレスや精神的健康度、また相談行動の利益とコストに対して与える影響を検討するため、重回帰分析を行った(図1, 2)。その結果、調整済み R^2 は、SRS-18が $R^2=.139$ 、ポジティブな結果は $R^2=.477$ 、問題の維持は $R^2=.257$ 、自己評価の低下は $R^2=.344$ 、自助努力による充実感は $R^2=.465$ 、秘密漏洩は $R^2=.264$ 、K6日本語版は $R^2=.443$ であり、いずれの変数においても1%水準で有意であった。



注) 有意なパスのみ描いてある。
** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

図1 援助要請の傾向を目的変数とした重回帰分析結果①

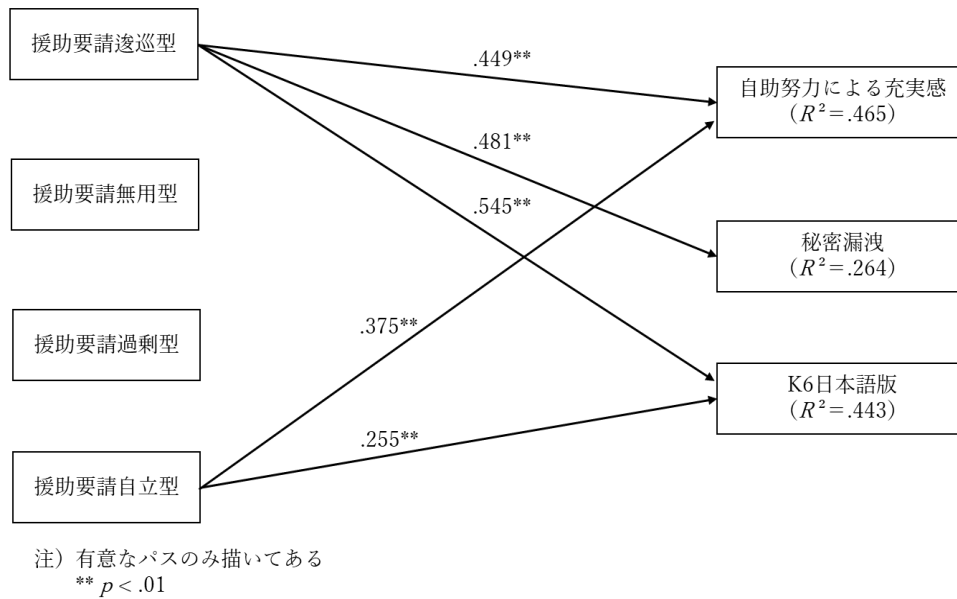


図2 援助要請の傾向を目的変数とした重回帰分析結果②

次に、援助要請逡巡型について、心理的ストレス反応を指す SRS-18 ($\beta=.258, p < .05$), 相談することによるコストを指す自己評価の低下 ($\beta=.564, p < .01$) と秘密漏洩 ($\beta=.481, p < .01$), 相談回避による利益である自助努力による充実感 ($\beta=.449, p < .01$), 精神的健康度を指す K6 日本語版 ($\beta=.545, p < .01$) に対し有意な正の影響が見られた。援助要請無用型については、相談することによる利益であるポジティブな結果 ($\beta=-.211, p < .05$) に対して有意な負の影響が見られた。援助要請過剰型は、相談回避によるコストである問題の維持 ($\beta=.334, p < .01$) に対して有意な正の影響、相談することによる利益であるポジティブな結果 ($\beta=-.283, p < .01$) に対しては有意な負の影響が見られ、また、ここ 1 か月の悩みや不安の経験頻度、ここ 1 か月の援助要請の経験との間に正の影響が見られた。援助要請自立型については、相談行動の利益であるポジティブな結果 ($\beta=.484, p < .01$), 相談回避による利益である自助努力による充実感 ($\beta=.375, p < .01$), 相談回避によるコストである問題の維持 ($\beta=.275, p < .01$), 精神的健康度を指す K6 日本語版 ($\beta=.255, p < .01$) に対して有意な正の影響が見られた。

重回帰分析の結果から、援助要請逡巡型は、心理的ストレスの高さや精神的健康度の低さに影響すること、さらに、相談することによるコスト（自己評価の低下、秘密漏洩）、相談回避による利益（自

助努力による充実感）を高く見積もる傾向にあること、援助要請無用型は、相談することによる利益（ポジティブな結果）を低く見積もることが示唆された。また、援助要請過剰型は、相談回避によるコスト（問題の維持）を高く、相談することによる利益（ポジティブな結果）を低く見積もる傾向や、悩みや不安の経験頻度や相談頻度が高い傾向にあること、援助要請自立型は、精神的健康度の低さに影響を与え、また、相談することによる利益（ポジティブな結果）、相談回避による利益（自助努力による充実感）、相談回避によるコスト（問題の維持）を高く見積もる傾向にあることが示唆された。

4. まとめと今後の課題

本研究より、大学生の援助要請の傾向は、援助要請逡巡型・援助要請無用型・援助要請過剰型・援助要請自立型の 4 つの傾向に分類されることが示され、さらに、各援助要請の傾向は異なった特徴を有しており、相談したくてもしない者（逡巡型）と、そもそも相談意図のない者（無用型）を回避型として一括りにまとめるのではなく、区別することには意味があることが示唆された。また、本研究の結果からは、相談したくてもしない者（逡巡型）は相談行動のコストを懸念していることから、相談行動のコストが低減するよう働きかけることで、援助要請行動が喚起されるのではないかと考えられる。具体的には、秘密が守られながら援助

要請が行える場を整えることや、そういった場の存在を周知することが、有用な支援となり得ると言えるだろう。

今後の課題としては、尺度の信頼性・妥当性のさらなる検証、それぞれの援助要請の傾向をもたらす要因を検討することが挙げられる。

謝辞

本研究を進めるにあたり、指導教員である本田周二先生には、研究内容の決定から調査の実施、論文執筆まで、厚いご指導とご助言をいただきましたこと、心より感謝申し上げます。

また、調査の実施にあたり、お忙しい中研究にご協力いただきました学生のみなさんに、感謝の意を表します。ありがとうございました。

引用文献

- [1] 一般社団法人日本私立大学連盟. "私立大学学生生活白書 2022". 一般社団法人日本私立大学連盟. https://www.shidaiaren.or.jp/files/user/20221011gakusei_hakusho.pdf, (参照 2023-8-31).
- [2] 西山温美ほか. 大学生の精神健康に関する実態調査. 川崎医療福祉学会. 2004, 14(1), p.183-187.
- [3] 永井智. 援助要請スタイル尺度の作成—縦断調査による実際の援助要請行動との関連から—. 教育心理学研究. 2013, 61(1), p.44-55.
- [4] 永井智. 臨床心理学領域の援助要請研究における現状と課題—援助要請研究における3つの問いを中心に—. 心理学評論. 2020, 63(4), p.477-496.
- [5] 永井智. 中学生における援助要請意図に関連する要因—援助要請対象, 悩み, 抑うつを中心として—. 健康心理学研究. 2012, 25(1), p.83-92.
- [6] 本田真大. 援助要請の認知行動的特徴, 自尊感情と精神的健康の関連. 学校臨床心理学研究: 北海道教育大学大学院教育学研究科学校臨床心理学専攻研究紀要. 2019, 16, p.3-10.
- [7] 永井智ほか. 中学生における悩みの相談に関する調査. 筑波大学発達臨床心理学研究. 2005, 17, p.29-37.

る調査. 筑波大学発達臨床心理学研究. 2005, 17, p.29-37.

[8] 茨木詩織ほか. 悩みを相談したくてもできない時に身近な人に求める接し方の検討. 筑波大学心理学研究. 2014, 48, p.19-28.

[9] 永井智. 援助要請スタイル間の差異に関する探索的検討—援助要請過剰型・回避型の特徴—. 教育心理学研究. 2019, 67(4), p.278-288.

[10] 勝又靖博ほか. 回避型援助要請スタイルを持つ中学生に対する援助の必要性に関する研究. 東京成徳大学臨床心理学研究. 2017, 17, p.105-115.

[11] 鈴木伸一ほか. 新しい心理的ストレス反応尺度 (SRS-18) の開発と信頼性・妥当性の検討. 行動医学研究. 1997, 4, p.22-29.

[12] 永井智. 相談行動の利益・コスト尺度改訂版の作成. 筑波大学心理学研究. 2008, 35, p.49-55.

[13] Furukawa, T. A. et al. The performance of the Japanese version of the K6 and K10 in the World Mental Health Survey Japan. International Journal of Methods in Psychiatric Research. 2008, 17, p.152-158.

付記

本研究は、大妻女子大学人間生活文化研究所の研究助成「回避型援助要請スタイルを持つ大学生の学生相談機関利用に向けた介入方法の検討」(課題番号: DB2204), 「大学生における援助要請の傾向を測定する尺度の作成」(課題番号: DB2304)を受けて実施した。

また、研究の実施に際して、「大学生における援助要請の傾向を測定する尺度の作成(研究1)」(受付番号: 05-011), 「大学生における援助要請の傾向を測定する尺度の作成(研究2)」(受付番号: 05-032)として、学内研究倫理審査委員会の承認を受けている。

なお本稿は、令和5年度大妻女子大学大学院人間文化研究科臨床心理学専攻修士論文として提出したものに、加筆・修正したものである。

(受付日: 2024年3月30日, 受理日: 2024年7月11日)

大篠 明莉 (おおしの あかり)

大妻女子大学大学院人間文化研究科臨床心理学専攻修士課程修了 (2024年3月)

専門は臨床心理学。

現在は、大学院での援助要請に関する研究を活かし、教育分野における心理職として勤務している。